「今、ここ」から考える社会学 (3)

（筆者は、スマホが日常に「穴」をあけ、そこから大量の情報が流れ込むようになったと述べている。）

確かに、あらゆる情報を瞬時のうちに確認したり手に入れたりできることは、すごいことかもしれません。しかしスマホを身体の一部にしていながらも、私たちは「穴」という「穴」から入ってくる情報の真偽や背景、根拠などの「意味」を同じく瞬時のうちに判断し、情報を取捨選択できる力と技量を備えているのでしょうか。またそうした力と技量が私たちのなかで育ってきているのでしょうか。言い換えれば、①玉石混交の情報の襲撃に対して、うろたえることなく冷静に向きあうことができるような②情報への〝耐性〟を私たちは、いま十分に身につけてきているでしょうか。

本章の冒頭に、私たちはいまスマホに〝飼い慣らされて〟いると書きました。これは私の実感から出てきた表現なのですが。スマホを飼い慣らすのではなく、スマホに飼い慣らされているとすれば、まさに、それこそ、情報への〝耐性〟を身につけておらず、スマホからあふれ出る情報に翻弄されている私たちの現在の姿ではないでしょうか。

③では、いかにしたら、情報への〝耐性〟を考え、自分なりに身につけていくことができるのでしょうか。

終日スマホとつきあうなかで、とりたてて目的もなく、ただ退屈をまぎらせるためにだけスマホに指を滑らせている自分の姿をいま一度確認してみてください。必要のない時間はスマホを切り、本を読んだり、別の営みをして、自らの情報をめぐるリテラシー（情報の質や意味を的確に判断できる能力）を高めていく、あるいはスマホを切り、いったん情報への依存を停止したうえで、自分の頭で、それまで自分が得てきた実践的な知だけを手がかりにして、いろいろなことについて思索する余裕を持つようにする、等々情報への〝耐性〟を養う試みは思い浮かびます。まずは、本書を読んでいるあなた自身がスマホからいったん距離をとって、日常を生きている自分の姿を考え直すことが第一なのです。

（好井裕明『「今、ここ」から考える社会学』筑摩書房　第3章による）

確認テスト　本文を読んで、問いに答えなさい。

(1)　――線①「玉石混交（玉石混淆）」の意味を選びなさい。

ア　価値がないように見えても、自分の役に立つこと。
イ　価値のあるものとないものとが、入りまじっていること。
ウ　価値はわからないけれども、十分な量があること。

〔　　〕

(2)　――線②「情報への〝耐性〟」とあるが、次の中から「情報への〝耐性〟を身につけている」例として適当なものを選びなさい。

ア　スマホをいつも持ち歩き、あらゆる情報を瞬時に手に入れることができる。
イ　スマホからの情報を完全に遮断（しゃだん）し、うろたえることなく日常を生きることができる。
ウ　スマホを通じて入ってくる情報の意味を判断し、落ち着いて情報を取捨選択できる。

〔　　〕

(3)　――線③「では、いかにしたら……できるのでしょうか」とあるが、これに対する筆者の答えとして、適当でないものを選びなさい。

ア　退屈をまぎらせるためにスマホを使うのではなく、情報を手に入れる道具として使うようにする。
イ　スマホを使わない時間を作り、情報の質や意味を自ら判断できるようになるために見聞を広める。
ウ　外部からの情報への過度な依存をやめ、自らの頭でものごとを考える時間を持つようにする。

〔　　〕